孕まされて捨てられた悪役令嬢ですが、
ヤンデレ王子様に溺愛されてます!? 2

◆プロローグ

「待って……！　アーヴィン、まだ戴冠式の最中なのよ！」
「ああ、わかってる」
――わかってるなら、このいやらしい手をどけて……！
宮廷管弦楽団が美しい祝祭の音楽を奏でている。陽が天窓から射し込み、荘厳な王宮は輝かしい光で満ちていた。
ようやく厳かな戴冠の儀が終わり、ホッとしたところで急に身体を玉座に押し付けられる。
何が起こったのか、考える間もなく両方の手を持ち上げられ、魔法金属の輪で手首を押さえ付けられた。
こんなことをするのは彼しかいない。
「アッ、アーヴィン……ッ！」
今は来賓の挨拶を受ける前の休憩時間だ。でも、休憩とは『二人で休憩』の意味ではない。
――やだ、油断してたっ！
アーヴィンの不埒な行いは止まらない。

「大丈夫だ。音も視線も遮蔽する魔術をかけてある」
——そんなこと言われてもっ、信用できないのよ！
これまで彼には、何度も人目のあるところで襲われてきた。いつも魔法で見えないようにしていると言っていたけど……全く信じられない。結婚してから十年、彼の重くて熱い愛情は変わらない。それは嬉しい……嬉しいけど！
——でも！　まさか！　戴冠式の途中で襲われるなんて、思うわけないでしょ！
恥ずかしくてたまらない。
今日は慶事のために国中から貴族が集い、外国の王族も祝辞を述べるために来訪している。大広間には大勢の人が歓談しながら次の式典を待っていた。それなのに……！
「ひどいっ」
「どうした？」
輝かしい王冠を頭上に戴いた彼が、隣にいる王妃を襲っているとは誰も思いはしないだろう。
涙目になったティーリアは、ぐっと堪えながら彼を見上げる。
「まだ終わってないのにっ」
「ああ、これからだからな」
会話が噛み合わない。戴冠式のことを言ったのに、彼は聞く耳を持っていない。
たった今国王となったアーヴィンは、裾を引くほど長い深紅のロングマントを肩にかけ、その下には数多の勲章をつけた濃紺の軍服を着ている。

さらに魔道騎士でもある彼の肉体は、鋼のような筋肉で覆われている。がっしりとした肩に、誰もが見上げるほどの長身。
そして見惚れるほど端整な顔をしている。キリッとした眉に、鋭さを増した蒼い双眸。黄金の髪はきらびやかに輝き、人々が求める強い国王を体現していた。
なんといっても戦場で奮闘し、勝利をもたらした魔道騎士だ。
実兄のジュストーが公には病気療養のために廃太子となったことで、王太子として立てられ国民からも絶大な人気を得ている英雄……なのに。
——なんでいつもいつもいつも、変わったところでシたがるのよっ！
さすがに今日は大人しくしていると思ったのに。着飾った人々の前で襲われ、羞恥で顔が赤くなる。それなのに、彼から顔をそむけることができない。
アーヴィンは形の良い唇の端をくっと上げると、ティーリアの顎をくいっと持ち上げた。
「あっ……い」
「イヤじゃないだろ？」
——嫌って言えば酷くするくせにっ！
こうなると彼が止まらないのは知っている。薄い唇を首筋に押し付け、空いた両手でティーリアの乳房を揉み始めた。
白く豪奢なドレスは宝石が輝き、身体のラインを美しく引き立てている。金糸で施された刺繍も美しい。

それなのに、アーヴィンの手は遠慮なくその裾をまくり上げ――
「お、お願い……ドレスは……ドレスだけは」
破らないで！
叫びたいのに、その声は彼の唇で塞がれる。紅く塗った口紅がとれてしまうのに、アーヴィンは構うことなくぷくりとした唇を口に含んだ。
くちゅり、と濡れた音がする。さらに太ももの内側をまさぐる彼の手もいやらしい。
「んっ……っ、ぁ、はぁ……んっ」
唇の裏側を重ねるように口づけられ、ティーリアは目を閉じた。あまりのことに心臓がドクドクと音を立てている。
――きっと、多分、誰も気づいていないわよね……？
けれどその時、王妃付きの女官が自分達を探す声が耳に届いた。
「妃殿下がどこにもいらっしゃらないの」
「陛下と休憩室に行かれたのでは？」
「その休憩室で、一向に姿が見えなくて」
――そうよねっ、まだここにいるからねっ！
ティーリアが抵抗するように身じろぎすると、ガタンッと玉座が揺れた。
「……あら、何か聞こえなかった？」
女官が振り返る。目が合ってしまいそうで、心臓がひと際高く音を立てる。

アーヴィンの魔術は完璧だ。だけど、彼の意地悪な性格を思うと、音が漏れている気がしてたまらない。
「ティーリア、静かにしないと……わかるよね？」
コクコクと首を縦に振る。まさか玉座でいちゃついているなんて知られたら、全てが台無しになる。それなら止めてくれればいいのに、目を細めた彼はいかにも楽しそうに口の端を上げた。
「綺麗だよ……国王になったら君とここで、こうしたかった」
「んんっ、ん――っ、んんっ」
アーヴィンの節くれだった指が、ドロワーズのクロッチをなぞる。まさか、ここで最後までするとは思えないけれど――
「びしょびしょだな」
「！」
ティーリアは目を瞠(みは)った。
意思とは違って、淫らな悪役令嬢ポジだった身体は官能を拾いやすい。特にアーヴィンに愛撫されると、途端に濡れてしまう。
それも、イケナイ状況になればなるほど、大洪水になってしまい――
「こっちの口は正直だな」
アーヴィンは色気を含んだ声で、耳元で囁いた。同時に膨らんだ花芽をキュッと摘まれると、ティーリアの身体を甘い刺激がビリッと駆け巡る。

「ぁあっ」
軽くイッてしまう。デビューの日に純潔を彼に奪われてから、幾度となく抱かれてきた。
それなのに、この身体は飽きるどころかアーヴィンという存在にますます弱くなっている。もう、キスだけでびしょ濡れになってしまうほどに。
はぁはぁと息を整えていると、彼はカチャリと音を立ててベルトを外した。既に股間が盛り上がっている。
このシチュエーションに彼は大興奮しているようだが、勘弁してほしい。
「あ、あの……アーヴィン、待って、さすがに最後まではしない、でしょ……？」
「少し黙って」
再び唇で蓋をされると同時に、アーヴィンの滾(たぎ)った怒張が蜜口に差し込まれる。
ぐっしょりと濡れているため、陽根はたやすく奥に入り込んできた。吸い付くような襞(ひだ)が彼の分身を包み込み、きゅうっと絞り上げる。
十八禁乙女ゲーム『あなたの愛淫に囚われて』の悪役令嬢、ティーリア・エヴァンスの身体は快楽に弱い。
それも最推しで最愛の夫、アーヴィンが相手とあれば、膣壁は離さないとばかりに絡みつく。
「っ、くっ」
さすがの彼もくぐもった声を漏らした。あまりの気持ち良さに一瞬で果てそうになるが、根性で堪えている。

「あっ……もうっ……あああ」
ありえないほどの快感に身体の奥が震える。彼の熱をダイレクトに感じると、それだけでイッてしまいそうになる。ティーリアはアーヴィンに染まりきっていた。
「時間がないから、急ぐよ」
そう宣言してすぐ、アーヴィンは腰を振り始めた。
ぐちゅ、ぐちゅっと水音が耳奥に響き、ティーリアの口からは喘(あえ)ぎ声しか出てこなくなる。
「あっ、あ、アーヴィンッ……おねがいっ……手、手を」
魔法金属(ミスリル)で玉座に縛り付けられた手を自由にしてほしい。
とろんとした目で口を半開きにしたままアーヴィンを見つめると、彼は「仕方がないな」と言い、すぐに魔法を解いてくれた。
ティーリアは自由になった手で彼の両腕にしがみつく。動きが激しさを増し、細い身体が揺さぶられた。
そうなると、もうなんの音も頭の中に入らなくなる。
「ああっ……あっ……ああ――っ！」
ガタガタと玉座が揺れ、激しい音を立てた。煌(きら)びやかな装飾が施され、権威の象徴であるはずのものが――ティーリアは何も考えないことにする。
絶対に自分は悪くない。アーヴィンがおかしいだけだ。こんなところで襲うなんて。
「リアッ、ティーリアッ！　……くっ、孕めっ」

「ああっ」
腰を押し付けられると、膨れた先端が最奥に届く。びくびくっと魚が跳ねるように震えた途端、大量の精が胎内に吐き出された。
彼の熱液を浴び、子宮が悦びに包まれる。なんて、気持ちがいいのだろう――
頭の中が真っ白になる。
突き抜けた悦びがティーリアの身体を痙攣させた。そうして彼の劣情を受け止めたところで――……
「陛下がどこにもいないぞ」
「警備は何をしている！」
周囲の人々がざわめき始める。主役である二人がいないのだから、そうなるのはわかりきっていたことなのに。
「時間切れだな」
ふうっと息を吐いたアーヴィンは、気だるい目をしながら男根を引き抜いた。
すると栓のなくなった孔から、こぷりと白濁した精が溢れてくる。
「どうしよう……ドレスが」
匂いもついてしまった。それに化粧も落ちている。髪もほどけ、これでは何をしていたのかすぐにバレてしまうだろう。
アーヴィンはサッと身づくろいすると、ティーリアを横抱きにした。

「部屋に飛ぶぞ」
「えっ」
転移術を使った彼は、一瞬で王宮の私室へ飛んだ。優秀な魔術師とあって、短い距離なら二人同時に移動できる。
このことを知っているのは、王宮でも限られた者だけだった。
夫婦の寝室に行くと、アーヴィンはティーリアを寝台にゆっくりと横たわらせる。
「後のことは心配しなくていい」
「でも……」
「俺に付き合ってくれたんだから、君は休んでくれ。王妃は体調を崩したと言っておけば、大丈夫だ」
かっこいいことを言っているけど、元はと言えばアーヴィンが引き起こしたことだ。非常識にもほどがある。
ティーリアは「もうっ」と言いつつ頬を膨らませた。
「ははっ、やっぱりティーリアはすました顔より、こっちの方がいい。ガチガチに緊張していたのが、ほぐれただろう？」
「……アーヴィン」
彼は頬にそっとキスをすると、甘い声で囁いた。
「愛しているよ、私のかわいいティーリア」
「……そんなこと言って」

文句を言いたいところだけど、さすがにアーヴィンだけでも戻らないとまずいだろう。ティーリアは彼に甘えることにした。
まだ身体に力が入らない。少しだけ休もうと横になるとそのまま、目を閉じてしまうのだった。

◆第一章

十歳の頃に自分が転生したことに気がついたティーリアは、悪役令嬢として断罪され破滅する未来を回避するため、ひたすら走り、第二王子のアーヴィンが病まないように身体を鍛えさせた。
その甲斐あって、真に愛し合い二人は結ばれる。だが隣国のスギリル帝国が攻めてきたため、戦争となり彼は魔道騎士として従軍した。
戦いの最中に部下を庇った彼は捕虜となったが、その間も身体を蝕む魔毒を浄化する力をティーリアから受け、生き永らえていた。
一方アーヴィンとの婚約を破棄されたティーリアは、王太子のジュストーと結婚させられそうになる。
けれど妊娠していることに気がつき、公爵令嬢の地位を捨て平民のフリをして男の子を産んだ。その子にはクリストファーと名前をつけた。
そうしてアーヴィンの活躍によって戦争が収束すると、彼は市井にいるティーリアのもとに戻ってきた。
しばらく親子三人で暮らしていたが、アーヴィンは実兄のジュストーに恨まれ命を狙われた。囮としてティーリアが攫われるも、アーヴィンはジュストーを倒し、北の塔へ幽閉した。
平安を取り戻し、二人目の子どもも生まれて幸せに過ごすようになって十年。アーヴィンは父から王位を譲り受けたのだった。

そして……ティーリアにとって黒歴史となった戴冠式からしばらく経った夜。
夫婦の寝室に行くと、彼はまだ起きて本を読んでいた。
「アーヴィン、まだ寝ないの？」
ここ最近、国王となった彼は忙しくしている。王太子時代からかなりの執務を担っていたが、その比ではない量の問題と向き合っていた。
寝不足のせいで目の下にうっすらと隈を作っている。
「ああ、これをもう少し読んでからだ」
——身体、休めてほしいのに……
幼い頃から近くにいたティーリアは、彼がなりたくて国王になったわけではないことを知っている。無理もしているに違いない。
それなのにアーヴィンは、書庫から本を持ち出しては読み漁るようになっていた。昼間は激務のため、読書できるのは夜しかない。

浅くため息を吐いたティーリアは、彼の読んでいる本に目をとめた。
「……なんの本なの？」
「これか？　これこそ代々の国王しか読むことのできない禁書だ」
「えっ、禁書？」
やけに年季の入った本だと思っていたら……なんと、ダフィーナ国の王にしか読めない魔法がかかっているという。
「内容も凄いぞ。存在だけが知られ、禁止された魔術の詳細が書かれている」
「へぇ、例えばどんなのがあるの？」
興味本位で聞いてしまうと、アーヴィンは声を弾ませ教えてくれる。まるで無邪気な子どものようだ。
「そうだな……今読んでいるのは、死んだ人の時を戻す魔術だ」
「……！」
「だが、術者の代償がかなりあるようだな」
魔術師としても優秀な彼の興味は、どうやら尽きないらしい。禁術を知ることも王の務めだと言い、目を輝かせて読みふけっている。
少し心配になるけれど、こうなった彼を止めることは難しい。
「代償って、何かを失うってこと？」
「あー、その内容は知らない方がいい」

きっと、自分の苦手とする血なまぐさいことなのだろう。大胆なようでいて、彼はティーリアの嫌がることは避けてくれる。
――閨（ねや）のこと以外では。
彼は相変わらず食い入るように本を読んでいる。きっともう、邪魔しない方がいいだろう。
ティーリアは冷えた寝台に身体を横たえた。
「……先に休むね」
「ああ」
ちょっとばかり寂しさを覚えつつ、ティーリアは天井を眺める。机の上の明かりはいつまでも消えることがなかった。

二人の子どもであるクリストファーは、アーヴィンの絶大な魔力を引き継いでいた。幼い頃から訓練を重ねたため、コントロールも上手だ。
将来は父親と同じく魔道騎士となれるよう、身体も鍛えている。
蜂蜜色の髪に紺碧（こんぺき）の瞳と、見た目も父親にそっくりな彼は、なんと早熟なところもアーヴィンに似ていたようだ。
五歳の頃に出会った年上の令嬢を見初（みそ）め、既に婚約している。
――ちょっと、執着が強い気がするけど……大丈夫よね……
クリストファーの婚約者は、ティーリアの生家であるエヴァンス公爵家と肩を並べる力を持つ公

爵家の令嬢だ。彼が王位を継いだ時に、大きな支えとなるに違いない。
そうした意味では、安心できる相手であった。どうかこのまま、無事に育ってほしい。
反対に二人目の子、マリーティアは魔力の少ない娘であった。母親と同じ赤紅色の髪をした愛くるしい王女である。
一見儚げに見えるけれど、中身もティーリアに似てしっかりしている。
兄であるクリストファーの後ろをついてばかりいたのに、最近は一人で本を読むようになっていた。既に周辺国の王族から婚約の引き合いがあるけれど、アーヴィンは「遠くには嫁に出さん」と言っている。
彼はとても子煩悩な父親になっていた。
そうして日々を過ごしていたある時、王宮で開催されたお茶会に来た婦人が嬉しそうに『珍しい食べ物』の話を始めた。
「とても不思議な触感の食べ物でした。白くて弾力があり、引っ張ると伸びますの」
「……白くて、弾力があって、伸びる？」
「はい、甘いソースがかけられていたのですが、とにかく食感が珍しいものでした」
――それって、お餅では？
異世界転生をしているティーリアは、うっすらと前世の記憶が残っている。
ここが乙女ゲームの世界とわかってから二十年も過ぎているが、食べ物のことは未だにはっきりと覚えている。

「よろしければその食べ物のこと、もっと詳しく教えてくださるかしら？」
「もちろんですわ！」
ティーリアはひたすら懐かしかった。この異世界でお餅が食べられるかもしれない。さすがに海苔も醤油もないけれど、砂糖をまぶすだけでもいいだろう。
期待に胸を膨らませた彼女は、まさかそれが原因で自分に不幸が襲いかかるなど、思いもしなかった。

しばらくすると、待望した食材がティーリアのもとに届いた。東方で栽培されている植物から、なんともち米に似た白い種が採れるという。
「妃殿下、これはどうやって料理するのでしょうか」
「皮をむいて白い種だけにして、それを蒸してから太い棒を使って何度も打つの。そうすると、もちっとした感触になると思うわ」
ティーリアは前世の知識を使い、もち米から餅を作る。何度か試行錯誤すると、ようやく夢にまで見た『お餅』が完成した。
つき立てのお餅に砂糖やソースなどを絡めて味付けする。おやつに丁度いい、甘い菓子のようなお餅ができた。
早速、休憩中のアーヴィンと一緒に食べようと執務室に持っていく。
「アーヴィン、ちょっといいかしら」

「どうした？」
ティーリアはお皿に載せたつき立てのお餅を机に置いた。すると周囲にいる文官達が気を利かせ退室していく。
「これはなんだ？」
「東方から取り寄せたお餅なの。一緒に食べようと思って」
ソファーに腰かけたティーリアは、アーヴィンに説明しながら餅を皿にとり、一口で食べてしまう。懐かしい食感がして、感動していたその時――
「んっ、んん！」
喉に詰まった。
「ティーリア？」
なんと、餅が気道を塞いでいる。このままでは、息ができなくて窒息してしまう。
「どうした？　ティーリア、ティーリアッ！」
アーヴィンが必死な顔をして自分の名前を叫んでいるけれど、目の前が一気に暗くなる。なんてことだろう、餅を喉に詰まらせるなんて――
――アッ、アーヴィンッ……！
彼が何か呪文を唱えている。しかしティーリアの意識は暗転し、そこで途切れてしまったのだった。

◆

ぱちりと目を開けると、懐かしい天井が見える。薄いカーテンを垂らした四柱のある寝台に、お気に入りだったネコ足のスツール。
ティーリアの生家、エヴァンス公爵家の私室だった。
――あれ、私……いつ帰ってきたの……？
公爵家を飛び出すように家出して以来、この部屋に帰ったことは数回しかない。アーヴィンと結婚してからは王子妃として離宮にいたし、最近は王妃として王宮住まいだった。
生家とはいえ、ティーリアが帰省するとなると大事（おおごと）だ。そんな煩（わずら）わしいことをするよりはと、父母や弟に王宮に来てもらっていた。どうして……と思い自分の手を見ると、違和感がある。
――ん？　手が……小さい？
身体の感覚もおかしい。気だるい感じが全くしない。
「なんで？」
喉を震わせ声を出してみると、普段よりも一オクターブほど高かった。それに餅が喉に詰まっていた苦しさもない。
おかしい、こんな声ではなかったのに……
「おっ、お嬢様！　目が覚められましたかっ？」

部屋の隅に控えていた侍女がやってくる。顔を見ると、幼い頃に世話をしてくれた人だ。
――お嬢様……？　王妃じゃなくて？
ティーリアはぱくぱくと口を開けた。小さな身体に、高い声。懐かしい子ども部屋。そして頭の中に飛び込んでくる記憶の数々。
――待って、ちょっと待って！　もしかすると、私の時が巻き戻ってる？
ティーリアの最後の記憶は、王宮にあるアーヴィンの執務室で餅を喉に詰まらせたことだ。もしかすると、あの時窒息死したのかもしれない。すぐ傍にいたアーヴィンは、とても焦った表情をしていた。
――時戻りの魔法……？
死んだ人の時を戻す禁術があると彼は言っていた。アーヴィンほどの魔術師であれば、それを発動させたのかもしれない。でも、それには大きな代償が伴うとも言っていた。
――大きな代償だなんて……アーヴィンッ、あなた……っ！
何が起きたのか思い出そうとすると、ズキッと頭が痛くなる。そして脳の中に流れ込んでくるのは、ティーリアが異世界転生する前の人生だ。
社畜のように働いて、階段から足を滑らせた。せっかく働いて稼いだ給料を残したままで、それが悔しくて……
――ちょっと待って！　貯金だけじゃない、私、投資もしていた！
なぜかあの頃の資産を思い出してしまう。孤児だったから、生きていくのに精いっぱいだったけど……少ない給料の中からやりくりして、将来のために備えていた。
それなのに……！　あの銘柄、値上がりしたのかな。
ティーリアはハッとして天井を見つめる。
――こんなこと、考えてる場合じゃない！
アーヴィンや子ども達を残してきた。もし本当に窒息死しているなら、とても悲しんでいることだろう。
前々世の貯蓄額より、アーヴィン達のことを心配しないといけないのに……
混乱するティーリアの傍で、顔を覗き込んだ侍女がホッとした表情を見せる。
「よかったですわ……王宮でかけっこをして倒れられたと聞いた時は、心配しました」
この声にこの言葉。どこかで聞いた覚えがある。
そして、王宮で倒れたなんて……それもかけっこでとなると、一度しかない。
ティーリアはカッと目を見開いた。
「い、今って私、何歳？」
「はい？　お嬢様？」
「今日はいつなの？」
いきなり声を上げたティーリアを訝しみつつ、侍女はすぐに答えてくれた。
「お嬢様は先日、十歳になられたばかりですわ」
――十歳！

間違いない。前世で、前々世を思い出したタイミングだ。
ダフィーナ国を舞台にした十八禁乙女ゲーム『あなたの愛淫に囚われて』の世界。ヒロインであるシャナティ・メティルバ男爵令嬢が、数々の超絶麗しい男性陣を攻略していくぬるゲー。
婚約者である第二王子アーヴィンに近づいたシャナティが気に入らなくて虐(いじ)め抜く、悪役令嬢ティーリア・エヴァンス。
ヒロインがどのルートを選んでも、悲惨なエンドを迎えるざまぁ要員だった。
――って、私……ここからやり直すの？
信じられないけれど、十歳に時が巻き戻っている。アーヴィンと幸せな人生を送っていたのに、餅を喉に詰まらせて死んでしまうなんて、愚かとしか言いようがない。
なのに頭の中は、自分が悪役令嬢だった世界のことでいっぱいになる。
でも、前世では結局のところシナリオは関係なかった。だから今世でも関係ないと思いたいけど……
戻ってしまったものは仕方がない。これからは絶対に――
「お餅だけは食べないわ……」
「ティーリアお嬢様？」
「いえ、なんでもないの」
幼い身体に戻ったティーリアは、ぷるぷると全身を震わせる。そうして戸惑いながらも破滅を回避するため、これからどう生きるのかを考えるのだった。

乙女ゲームの中のティーリアは、ヒロインであるシャナティ・メティルバを虐め、断罪される悪役令嬢だ。
さらに淫乱な彼女は攻略対象達を誘惑し、堕落していく。最後は監禁されることもあれば、処刑される場面もあった。
それを回避するには……また、アーヴィンと共に身体を鍛えるしかない。
彼女を堕とす重要人物であるヤンデレ王子のアーヴィン。彼だけでもまともになれば、以前のように幸せな結婚生活を送ることができるだろう。
そう思う一方で、夜になって一人になるとさすがに心細くなる。
頭の中身は大人のはずなのに、十歳の小さな体に引きずられてか、どうやら感情はそうではない。薄暗い寝室で横になっていると、ティーリアは残してきた人達を思い出した。
特に二人の子供達。マリーティアは七歳になったばかりだから、きっと母親がいなくて悲しんでいるだろう。思い出すだけで辛くなる。
――ごめんね、二人とも……またあなた達に会えるように、頑張るから……
そのためにはアーヴィンがヤンデレにならないよう、しっかり矯正(きょうせい)しなくては。
今度は彼と離れることなく結婚し、子育てもやり遂げ、最後まで一緒に過ごしたい。
さらにできることなら、戦争などなくなればいい。
欲張りだけど、全て叶えたい。せっかく人生をやり直すのだから……ティーリアはギュッと唇を

引き締める。
泣いちゃダメだと自分に言い聞かせながら、小さな瞼を閉じるのだった。
翌日になると王宮から使いがあり、憔悴したアーヴィンがやってきた。王宮で倒れたのは彼と遊んでいた時だから、相当心配していたようだ。
「ティーリア、大丈夫かい？　熱は下がったと聞いたけど」
――アーヴィン！
駆け寄ってきた愛しい夫の姿を見て、ティーリアは目を瞠る。蜂蜜色の髪に蒼い瞳はそのままだ。まだ彼は十二歳の子どもだけれど、面影は十分にある。
ティーリアに向ける表情は優しく、瞳には甘さを含んでいた。それに同年齢の子達と比べると背も高く、身体つきもしっかりしている。
何よりも攻略対象とあって、見ているだけで麗しいキラキラした王子様だ。表面上は。
愛しい人の姿を見ると一気に胸の奥から熱いものが込み上げ、ティーリアは涙をポロポロと流してしまった。
「うわあああん」
「ティ、ティーリア？」
いきなり号泣した彼女を見て、アーヴィンは動きを止めた。
どうやら動作や感情は身体の年齢に引きずられるため、ティーリアは幼い子供のように泣き続ける。
えぐっ、えぐっと嗚咽しながら涙を流していると、アーヴィンが恐る恐る手を伸ばしてくる。濡れた瞳で見上げたところ、彼は表情を消していた。
「……アーヴィン、様？」
舌足らずな声で名前を呼ぶと、彼はビクリと身体を震わせる。
――あっ！　そうだった！
前世のアーヴィンは、ティーリアの泣き顔を見ると興奮していた。
あまりにも昂るので「もしかして性癖なの？」と聞いたところ、「そうだ」と白状していた。
三歳のティーリアに初めて会った時、泣いた顔を見て気に入ったとも。彼はまだ五歳の男の子だったのに。
だとすると、今のアーヴィンも相当危うい。よく見ると指先がぷるぷると震えている。
「ごめんなさいっ、私、泣いちゃった」
泣き顔を隠そうとすると、アーヴィンは素早く腕を伸ばしてティーリアの手を掴んだ。涙を拭くでもなく、固まってしまう。
「……ティーリア」
「あの」
どうしよう。
まさか、十二歳の彼に襲われるとは思わないけど……泣き顔のまま見つめると、アーヴィンは瞳

をキラリと光らせる。まるで、獣が獲物を見るようで――
「ひっ」
思わず声を上げてしまう。
食べられるのではと危ぶむくらい強い視線を感じ、ティーリアはふるりと身体を震わせた。
以前はよく、アーヴィンが闇落ちしないようにと願ったけれど――彼は顔を近づけ、ティーリアの涙を吸い取るように目尻にキスをする。
今度はティーリアが固まる番だった。泣いてしまったのは自分だけれど、まさか涙を吸い取られるなんて……それも、少年の旦那様に。愛しさがこみ上げてくる。
「好き」
「ん？」
「アーヴィン様、好き」
かわいくて、かっこよくて、そして愛しい。溢れる想いのまま、ティーリアは彼に抱きついた。
すると赤紅色の髪が揺れる。
泣き顔に興奮する変態でもなんでも、やっぱり彼のことを愛している。
ありったけの力を手に込めると、彼はまだ細い腕を伸ばして受け止めた。
「ど、どうした？　ティーリア。今までそんなこと、言ったことなかったよね」
これまでのティーリアは自己主張をしない子どもだった。アーヴィンの後ろをついていくだけの少女だったのに、今は自ら抱きついている。

アーヴィンは戸惑いつつも、「好き」「大好き」「やっぱり好き」と言いながらくっついてくるティーリアを、引き離すことはできなかった。
「僕も……ティーリアが好きだよ」
ついには彼も、小さな婚約者を抱きしめて告白する。
この時の泣き顔が彼の胸に直撃して、執着を増すことになるとは思いもせず――ティーリアは彼の胸に顔を埋めるのだった。

しばらくして泣きやんだティーリアは、ハッと気がついた。
――そうだった！　このまま彼にはもう一回、『爽やか王子』を目指してもらわないとっ！
彼を闇落ちヤンデレ王子にはさせない。一度はできたのだから、再び頑張ろう。
未来がどうなるか、この時点では予測できないけれど、ティーリアの最大の希望はアーヴィンと結婚して幸せに暮らすことだ。
そこにたどり着けるように、できるだけのことをしておきたい。
そうとなれば、やはり次は――
「アーヴィン様っ、運動しましょう！」
「は？」
アーヴィンは口をぽかんと開けている。これまでの大人しいティーリアからは、想像もできなかったのだろう。

でも、そんなことを言っていては始まらない。
――健康な精神は、健康な身体から！
前世でもアーヴィンが闇落ちしなかったのは、身体を鍛え抜いたからに違いない！
「まずは準備運動からです」
「はあ？」
寝台を飛び降りたティーリアは、白いネグリジェのままだったことに気がついた。
「アーヴィン様、私は着替えますので、下の客室でお待ちくださいっ」
「ティーリア、だが……まだ休んでいた方がいいのでは？」
「そんなことを言っていたら、アーヴィン様のお妃にはなれません！」
まだ十歳だけれど、鍛えることはできるはず！
とにかく体力をつけないことには、何事も始まらない。破滅の未来を避けるには、これしかない。
「別に、今のままでも十分……」
「いえ、筋肉は裏切らないんですっ」
こうなったら前世よりも鍛えて、彼には誰にも負けない魔道騎士になってもらおう。今から頑張れば、筋肉も十分につくだろう。
「アーヴィン様、一緒に走り込みましょう！」
「あ、ああ」
唖然としながらも彼は頷いた。そして侍女に案内されて客室へ向かう。

エヴァンス公爵邸には広大な庭園があるため、そこを走り込むだけで十分鍛えることができる。
これまで弱気で人見知りをしがちだった少女が、いきなり走りたいと言うのだから周囲は騒然とする。
しかも公爵令嬢として淑女を目指すべきなのに、運動をしたいからと少年の穿(は)くようなズボンを身に着けた。
「アーヴィン様、まずはこの庭をぐるっと走りましょう」
これまで運動らしい運動をしていないティーリアの身体だ。走るといっても、アーヴィンに追いつけるはずもない。走り始めてもすぐに息が上がってしまう。
「ティーリア」
すると彼は、立ち止まっている彼女の背中に、そっと手を添えた。
「無理するんじゃない。まだ、病み上がりなんだから」
はぁ、はぁと息を整えながら、ティーリアは彼を見上げる。疲れていても、アーヴィンを闇落ちさせないためには運動を頑張るしかない。
「では、アーヴィン様は私をおんぶしてください」
「なに？」
生ぬるいことはしていられない。
隣国との戦争で、彼は魔力封じの首輪をはめられた。その状態から脱出できたのは、魔術を使えることに甘えず身体を鍛えていたからだ。

今世ではさらに筋肉をつけて、備えておきたい。そのためには走る時も、負荷をかけて効率よく運動しておきたい。
「いきますよっ！」
「……っ、わかった」
勢いをつけて彼の背中に乗り、ティーリアは首に腕を巻きつけた。ティーリアの両足を持ったアーヴィンは、落としてなるものかと必死になる。
風を切って走り出した彼の背中で、ティーリアの心が浮き立ってくる。
――きっと、大丈夫！　今世でもアーヴィンを病ませないからっ！
斜め上の頑張りを見せたティーリアは、彼の背に乗りひたすら応援するのだった。
あり得ないほどに密着しているせいで、アーヴィンが耳元を赤く染めていることには……ついに気がつかなかった。

アーヴィンの体力づくりのため、ティーリアは王宮へ行くたびに彼と一緒に運動をするようになった。そうして準備体操をしていると、あることを思い出す。
――そういえば！　私、大切なことを忘れていた！
アーヴィンの実兄、ジュストー・ケインズワース、未来の王太子のことだ。
彼は銀色の髪をなびかせ、中性的で美しい顔をしていた。背はアーヴィンよりも高いが、魔力はそれほどでもない。

前世で彼は、幼少時の事件が原因でアーヴィンに嫉妬し、憎しみを抱くようになった。
成長した彼は隣国と繋がり、戦争を起こしてアーヴィンを前線に送り出す。そのせいでティーリアも苦労することになった。
「あの、アーヴィン様。聞きたいことがあるんですけど」
「どうした？」
「ジュストー様と雨の中で、かけっこをしたことありますか？」
確か前世では、アーヴィンが彼をけしかけ、ジュストーは雨の中を走り高熱を出したと聞いている。
その高熱のせいで彼は子を作る機能を失い、アーヴィンを恨むことになった。その事件を回避できれば、いろいろと未来が違ってくるに違いない。
まだ事件が起こっていないといいのだけれど……
「雨の中で？　いや、していないよ」
「では、ジュストー様が高熱を出したことは」
「……そんなこと、聞いたことない」
――ああ！　それならまだ、男性不妊になってない！
「良かったぁ」
「良かったって、何が？」
アーヴィンが怪訝（けげん）な顔をするけれど、ティーリアはそのことに気がつかないまま、思いつきを口にする。

「アーヴィン様。今日はジュストー様もお誘いしましょう！」
「……兄上を？」
「はいっ！　人数が多いと楽しいですっ」
不思議そうにしながらも、ティーリアの頼みであればと、アーヴィンは侍従を呼んだ。
大丈夫かな？　と思ったけれど、まだ決定的な事故は起きていない。突然の誘いに戸惑いつつも、ジュストーも興味があったのか姿を見せる。
銀色の髪を後ろで一つにくくっている姿には、大人になった時の面影があった。だが、憂いを含んだ表情ばかりであった前世よりも、まだ素直に感情を表している。
「ティーリア嬢、私を呼んだと聞いたが、用件はなんだ？」
アーヴィンより二つ年上の彼は、威張るように二人の前に立った。これまで三人で遊ぶことは皆無だったから、驚かれるのは仕方がない。
「はい、今日から一緒に運動をしたいです」
「……運動？」
「筋肉トレーニングです。明るい未来のために、筋肉をつけましょう！」
アーヴィンは骨格がしっかりしているのか、細身ではあるが既にがっちりとした身体つきとなっている。
それとは対照的に、ジュストーは少年にしては細い身体をしている。だが、運動することで改善できるだろう。

「……筋肉？」
「はい。ジュストー様は筋肉をつけるといいです」
ティーリアの小さな身体に引きずられた頭では、上手に説明ができない。
本当は精神を病む前にスポーツをして発散してほしいけれど、それをどうやって伝えたらいいのだろう。
結局、シンプルに『筋肉は全てを救う――』という信念をそのまま口にすると、なんとジュストーがうんうんと頷いた。
「わかったよ。僕も走ろう」
すると隣にいたアーヴィンがギョッとする。
「兄上……本気ですか」
どうやらジュストーも、身体を動かすことは好きなようだ。
そういえば前世では、大人になった彼は夜の運動会に積極的だったことを思い出す。未亡人や奔放な令嬢など、手当たり次第に食い散らかしていた。
できれば、彼にもそんな拗れた未来を選んでほしくない。
なぜなら弟であるアーヴィンは、いくらジュストーから恨まれても、最後まで兄のことを気遣っていた。冷淡なようでいて、家族を愛する人なのだ。
そんなアーヴィンに、実兄を断罪させたくない。
――すると考え込んでいたティーリアの顔を、アーヴィンが覗き込んでくる。

「どうした？　ティーリア」
優しく声をかけられ、ハッとする。
今はまだ子どもだから、今世をもっと良くすることはできるはず……！
そうと決まれば、王宮の庭園を使った走り込みを始めよう。今度は効率を考え、インターバル走法と呼ばれるトレーニング方法にする。ティーリアは進化していた。
「さ、ジュストー様も短距離からですよ」
「……本当に走るのか？」
「はいっ！　まずは私に追いつかれないように、頑張りましょう！」
十四歳のジュストーと十歳のティーリアでは勝負にならないように見えたが、最近は走り込んでいるためティーリアは慣れていた。
ジュストーのプライドの高さを利用し、その気にさせて走らせる。アーヴィンの方が基礎体力はあるけれど、彼にはウエイトを乗せハンデをつけるようにした。
もちろん二人共に魔力封じの腕輪をつけておく。アーヴィンはもちろんだが、ジュストーもそれなりに魔術を使えるためだ。
筋肉をつけるのだから、身体強化の魔術を使われては意味がない。
「さ、準備体操が終わったらスタートしますよ！」
「っ、わかった」
ティーリアが元気に励ましたため、ジュストーもその気になってきた様子だ。

「よーい、スタート！」
晴れ渡る空の下、三人が走り出した。短距離を何度も繰り返すことで、持久力を上げる方法だ。
そうしているうちに、ティーリアはいつの間にか『スポーツ・コーチ』のような役割となる。
公爵令嬢がどうして……と周囲は不思議に思うけれど、彼女の勢いは止まらない。
王子だからといって、特別扱いすることなく鍛えていく。いつしか『走り込み令嬢』どころか、『筋肉令嬢』と呼ばれるようになった。
ティーリアはそんな噂を聞いても気にすることなく、運動に邁進（まいしん）するのだった。

前世でほとんど接点のなかったジュストーと今世では共に走るようになり、彼とアーヴィンの兄弟仲も自然なものとなっていく。
互いに関わり合うことを避けていた二人が、今ではティーリアの目の前で一緒に腕立て伏せをしている。
「はい！　いち、にっ、いちっ、にっ」
「っ、くっ……っ！」
「はっ……っ」
初めの頃は筋肉の欠片もなかったジュストーだが、白い肌の下にうっすらと筋が見えるようになった。この年代の二歳差は大きいけれど、将来魔道騎士となるアーヴィンの体幹は優れている。
競争させると、どちらも負けるものかと額どころか顔中に汗をかいて努力していた。

「ラスト――ッ！　はいっ、いち、にっ」
終了の合図をした途端、二人はベタッと腕を伸ばして床に倒れ込んだ。はぁはぁと荒い息をしている。
「ティーリア……あの水をくれ……っ」
「はいはい」
容器に入れておいた水をコップに移し、二人のところへ持っていく。
塩と砂糖、それに搾ったレモン汁を加えたものだ。いろいろと試し、スポーツドリンクに近い味の配合を見つけ出していた。
アーヴィンもジュストーも気に入っているため、運動する時は欠かさないようにしている。
「ゆっくり飲んでくださいね」
そうは言っても、渇きを覚えていた二人は中身をすぐに飲み干してしまう。
無言で空のコップを差し出され、ティーリアは再び特製スポーツドリンクを注いでいく。
「二人とも、頑張りましたね」
「ああ」
「そうだな」
二杯目も飲み終えると、アーヴィンは立ち上がってストレッチを始めた。それをジュストーは座りながら見上げている。
「アーヴィン、お前は体力おばけだな」

「そうかな」
まだ息の整っていないジュストーと比べると、もう既に次の動作に移っているアーヴィンの方が体力はある。
けれど、最初の頃を思えば、ジュストーの成長には目を瞠るものがあった。
「ジュストー様はとっても伸びてます！　今ではアーヴィン様がウエイトをつけなくても、同じメニューをしているなんて凄いですっ」
「……まぁな」
ジュストーが捻くれないように、ティーリアはなるべく褒めることを心がけていた。
アーヴィンを大切に想う気持ちはもちろんある。だが、ジュストーは繊細で嫉妬深く、思い込みの激しい性格だ。
そのため厳しい指導をしつつも、彼の前ではなるべく笑顔を絶やさずにいた。
二人と会う時は決まって、ティーリアは少年のようなズボンとブラウスを着ている。動きやすさを優先した結果だ。
淑女のマナーは身についているから、大きくなったらドレスを着ればいい。長い髪も運動する時は邪魔になるため、後ろの高いところで一つにしばっていた。
「ティーリアの髪は、まるで馬のしっぽだな」
「ふへっ？」
晴天の下でトレーニングを終えたところで、顔の汗を拭きながらジュストーがからかうように声

をかけた。
「そうかな？　こんな色をした馬のしっぽなんて、見たことないですよ？」
「そうではなくてだな……」
ジュストーは腕を伸ばして赤紅色の髪に触れると、それを下に引っ張った。するとティーリアの顎が上がる。
「もうっ、何するんですか！」
「ははっ、こうして私に向かって吠えるところが似ているのだ」
むうっとした顔を向けると、彼は朗らかに笑う。
なんの憂いもなく笑みを浮かべるジュストーを見ると、『どうかこのままのジュストーでいますように』と思ってしまう。
彼は「悪かったな」と言いつつティーリアの頭を撫でた。白くて大きな手は、柔らかくて美しい。滑らかな手で触れられると、気持ち良くてつい目を細めてしまう。
すると、それを見ていたアーヴィンが近づいてきた。
「兄上、あちらで侍従が呼んでいましたよ。次の予定があるのではないですか？」
「もうそんな時間なのか？」
彼は手を引っ込めると、今度はアーヴィンの髪をわしゃわしゃと崩す。
「うわっ、兄上！　何するんですかっ」
慌てるアーヴィンをからかうジュストー。二人ともまるでじゃれついている大型犬のようだ。

「お前の髪は硬いんだな」
「ティーリアの髪と比べないでください」
「それもそうか」
機嫌の良さそうな顔をして、ジュストーは王宮にある自室へ戻っていく。どう見てもアーヴィンに恨みを持っている様子はないため、そのことにホッとする。
――良かったぁ……どうか今世では、このまま兄弟仲が拗れませんように……
つい、ジュストーの後ろ姿をジッと見つめてしまう。ずっと、このままでいてほしい。
前世ではいろいろと拗らせたジュストーが、アーヴィンを襲い危険な目に遭わせたからだ。
今世では、そうならないように二人を育てたい。
母になったような気持ちでジュストーを見送るティーリアの横顔を、アーヴィンは複雑な表情をして見つめていた。
やがて我慢ができなくなった彼が、低い声で問いかける。
「……ティーリアは、兄上が好きなのか？」
「あ……っと、はい？」
「俺にあれだけ好きって言っておきながら、兄上と結婚したいのか？」
不穏な空気を纏ったアーヴィンは、どす黒い感情を秘めた目をしている。
それは乙女ゲームの中で、ティーリアを凌辱（りょうじょく）していたスチール画のアーヴィンのようで、ぞくりと冷たいものが背中を上っていく。

「ち、ちがっ、違います……っ」
このままでは、病んだ魔道騎士に育ってしまう。乙女ゲームの中の彼は、非情かつ冷酷な人だった。本当の彼は違うと知っているけど、今のままではどうなるかわからない。そうなると破滅に一直線だ。
アーヴィンの後ろにどす黒い靄が見える。あれはもしかすると、魔術師特有の『魔毒』かもしれない。
魔毒――それは魔術を使いすぎると身体を侵す、毒のような症状を指す。
本来、魔毒を消すには高価な浄化アイテムを使うか、神殿で祈ってもらうしかない。下手をすると精神を壊し、最悪の場合は死に至ることもある。
魔術師になることは、魔毒との闘いを意味していた。その片鱗を見てしまい、ティーリアはぶるりと身体を震わせる。
――ア、アレが悪さしているのでは……？
彼が悪しき思いに囚われるのは、魔毒が原因かもしれない。
前世でティーリアは、魔毒を消す力を持っていた。その力があれば、あの靄も消せるかもしれない。
今世でも浄化できるのか、ティーリアはアーヴィンに触れて力を流してみようとする。
「アーヴィン様、ちょっとこっちに来てください」
凄まれたとしても、彼はまだ十二歳だ。精神年齢うん十歳のティーリアの敵ではない。
近寄った彼の手をとり、ギュッと握りしめるけど、力が上手く働かない。
もしかしたらと両手を伸ばして頬を挟み、額と額をコツンとくっつけた。

「うわっ……ティーリア！」
「ちょっと黙って」
ジワリと力が流れていく。これならちゃんと浄化できそうだ。
「ん、何かしているのか？」
「あーっと……っ」
この身体でも力は健在らしい。まだ幼いせいか弱いけれど、アーヴィンの魔毒を少しだけ消すことができた。
彼が背負っていた黒い靄も消えている。
敏感な彼は何かを感じ取ったようだが、まさか幼いティーリアに浄化する力があるとは思わないのだろう。
――よかった。これならまた、アーヴィンを癒せる……！
どうやら彼の不機嫌さも解消されたようだ。魔毒は精神に影響しやすいから、これからもなるべく彼に触れて消していこう。
額を離してアーヴィンを見上げると、不思議そうな顔をしている。
「頭の中がスッキリした……気がする」
「そうでしたか！」
にっこり笑うと彼も嬉しそうにはにかむ。
そんなティーリアの背中に腕を伸ばしたアーヴィンは、大人しくしている彼女の細い身体を

ギュッと引き寄せる。
そして自分の腕の中にいるティーリアを手放すものかと、しっかりと抱きしめるのだった。

◆第二章

ティーリアは望んだ未来のため、アーヴィン達の母親である王妃に近づいた。彼女はいつでもジュストーを優先しているので、その歪んだ愛情をどうにかしたいと思っていた。
前世では王妃として生き、二人の子どもの母親でもあったティーリアだ。王妃であるが故のプレッシャーも、孤独も、優越感すら体験している。
とは言ってもまだ幼いティーリアが王妃と会うのは難しい。そのため彼女が行きそうな場所に先回りし、偶然を装って話しかけるのだった。
今日も王宮の庭園にあるガゼボに彼女は佇(たたず)んでいた。この場所は王妃のお気に入りの場所であるため、よく姿を見せていた。
「王妃様、ごきげんよう」
「まぁまぁ、小さな貴婦人が来ましたわ」
どうやら今日は、機嫌が良さそうだ。
ジュストーと同じまっすぐな銀色の髪を揺らし、朗らかに微笑んでいる。気分の乱高下の激しい

王妃は、近づいてもギロリと睨まれるだけの日もある。
それでもティーリアは果敢に話しかけていた。彼女がジュストーばかりをえこひいきすることは、将来のためにならない。
二人の兄弟が仲良くするために、地道に王妃を説得することにした。
「王妃様、一緒にお茶をしてもいいですか？」
「ええ、いいわよ。ジャスミン茶があったかしら。子どもが飲むなら、その方が良かったわね」
「わぁ、ありがとうございます！」
気まぐれな人ではあるけれど、優しさも持っている。ティーリアは侍女の淹(い)れたジャスミン茶を飲みながら、陽気に話しかけた。
「王妃様、アーヴィン様の誕生日がもうすぐです」
「あら、そうだったかしら？」
「はい！　十三歳になるって言ってました」
「まぁ……それなら、何か贈り物をしないといけないわね」
そう言ってティーカップを持ち上げた。
しかし、口にしないで揺れる水面を眺めている。彼女が考え込む時の癖だった。
「でも、何がいいのかしら。全く思い浮かばないわ」
確かに思春期の男の子に何を贈ればいいか、迷うところだ。アーヴィンも例に漏れず、母親への態度はそっけない。

それでも母親自らプレゼントを選んだのであれば喜ぶだろう。そのくらいの素直さは持っている。
「では、一緒に過ごすのはどうでしょうか？」
「……アーヴィンと？」
「はい、お二人だけで。もしくは陛下と一緒に三人で過ごすのです」
「一緒にいて、何をすればいいのかしら」
王妃は本気でわからない様子だった。それだけアーヴィンと距離があるのだろう。それにどこか、アーヴィンを恐れているようだ。
それなら、とティーリアはいいことを思いついた。
「三人で運動するのはどうでしょうか」
「……はい？」
王妃は本気でわけがわからない、といった表情をしている。それでもティーリアは持論を主張した。
「筋肉は全てを解決してくれます。きっと、王妃様の悩み事も吹き飛んでしまいます！」
物理的にも強くなるし、いいことづくしだ。ティーリアはとてもいいことを言えたと、にこにこしてしまう。
「ティーリア嬢は……あの噂は、本当だったのね」
いつの間にか『筋肉令嬢』と噂されている件だろう。将来の淑女としてはとんでもない二つ名だが、ティーリアは案外気に入っていた。
実際、運動すれば悩みの半分は解決できたような気がする。

これまで、そうやって逞しく生きてきたのだから信条は曲げられない。
「はいっ、それでは何をするか、一緒に考えましょう！」
「え、ええ」
王妃は顔を引きつらせた。あのエヴァンス公爵の娘がどうして、こんなにも運動好きになってしまったのか。
公爵の後ろ盾が欲しくて、王子の一人と婚約させたけれど……その判断は果たして正しかったのかと、疑問を持ってしまう。
そんなことは露知らず、ティーリアは無邪気に誕生日プレゼントを提案する。
「追いかけっことか？　でもアーヴィン様は心臓が止まりそうになるくらい足が速いので、ハンデをつけないといけないですね」
「走るのは無理よ」
「でしたら綱引きはどうですか？　綱を引っ張るだけなので、簡単ですよ？」
「……できる気がしないわ」
周囲にいる侍女達もヒヤヒヤしていた。いくら王子の婚約者とはいえ、王妃を怒らせてしまわないかと――
「うーん、難しいですね」
「でも運動しているのを、応援することはできそうだわ」
「そうですね、まずはそこからでしょうか……」

こうしてアーヴィンの誕生日に、小さなスポーツ大会が開かれることになった。
この時のティーリアは、まさかこの大会が悲劇を生み出すとは、思い至らなかった。

澄み渡る青い空――とは言いがたい、どんよりとした曇り空。
騎士達が闘技を行う広場を使い、スポーツ大会が開催された。アーヴィンへの誕生日プレゼントとして、国王夫妻が用意したものだった。
普段から練習している短距離走に、王宮をぐるっと一周する長距離走。参加者はアーヴィンとジュストーだけでなく、騎士団に所属する見習いから正騎士までいる。
噂を聞いた貴族達が大勢見学に訪れていた。
普段は接点のない騎士達を見学できるとあって、若い令嬢達も大勢いる。準備運動をしている者達を見て、黄色い声が飛び交った。
王子達も騎士と同じ青い服を着ている。魔道騎士は黒、通常の騎士は青色と決まっていた。
アーヴィン達が青い騎士服を纏うのは珍しい。ジュストーなど、まだ肩につくかつかないか、といった長さの銀髪をハーフアップにしている。
「ほら見て、ジュストー様よ……麗しいお姿だわ」
「ホントねぇ……いつ見ても美しい方よね」
色が白く、騎士達に比べると身体の線も細い。本当に美少年とも美青年とも言える人だ。
どうやら騎士団長が彼についているのか、騎士達に囲まれている。

ティーリアは隅で柔軟体操をしているアーヴィンのところへ近づいた。すると彼は、不機嫌な様子を隠すことなく文句を垂れ流す。
「なんで誕生日プレゼントが運動なんだよ」
「でも、陛下達が見に来てくださるって！」
ティーリアはちょっとだけ拗ねているアーヴィンを励ました。きっと照れ隠しもあるのだろう、本音では喜んでいると思いたい。……多分。
運動する前のストレッチは大切だと、いつも口を酸っぱくして伝えている。怪我を予防して、パフォーマンスを向上させるためだ。
アーヴィンは両足を伸ばして座ると、上半身を曲げてつま先を持った。
「そこの筋を伸ばして、二十秒ね」
「わかった」
そうしてティーリアは数え終わると、アーヴィンに「はい！　終了！」と元気良く声をかけた。
「ところでティーリアは出場しないのか？　子ども部門もあるだろう」
「うーん……ホントは出たかったけど、さすがにお父様に反対されちゃった」
王子達や従騎士達の出場する青少年部門と、正騎士達の大人部門とは別に、騎士の子息などを集めた子ども部門もあった。
ティーリアも出場するつもりだったが、さすがに親の許しがないと出られない。
貴族令嬢が人前で走る姿を晒すなんて、と叱られてしまい、それは叶わなかった。平民であれば

男女を気にすることなく、皆走っているのに。
——やっぱり、悔しいなぁ……
貴族であっても、男女問わず走ることができるといいのに。
令嬢であっても基礎体力があった方が絶対にいい。けれど、文化として根付いているものを変えることは難しい。
それこそ王族が先頭に立って変革していかないと、難しいだろう。
それは将来へとっておくとして、ティーリアはうーん、と言って腕を上に伸ばした。
「はぁーっ、くよくよしていても仕方がない！」
せっかくだから、たくさん応援して楽しもう。ティーリアが両腕を下ろすと、アーヴィンが立ち上がって腕を組んだ。
「そうだな。青少年の部で優勝したら、何か褒美をくれ」
「……褒美？」
足で踏むとか？
いや、まだ彼はそんなことに目覚めている年じゃない……はず。ありとあらゆる性技を試したいと言われ、いろいろとやらされた身としては、なるべくそっちには行かないでほしい。
普通がいい、普通が。
「でも、誕生日プレゼントは渡したよね」
刺繍入りの汗拭き用の布を渡してある。肌触りも良くて、汗もよく吸うのに気に入らなかったのだろうか。名前と一緒に、彼が走っている姿の絵柄を刺繍したのに。
「うーん、そうじゃなくて……」
「やっぱり踏まれたい？」
「は？」
アーヴィンは何を言われたのかと、びっくりしている。
——あ、違うんだ。……良かった。
変な性癖に目覚めていなくて良かった。けれどまだヤンデレの気配は残っているから、注意しないといけない。
だとしたら、何がいいだろう。ご褒美と言われても、すぐには思い浮かばない。
そうしているうちに、大会の開始時刻が近づいてくる。アーヴィンは「全部一位をとるから、しっかり見ていろよ」と言い、背中を見せた。
ティーリアは「もちろんだよ！　頑張ってね」と声をかけると応援席に戻っていく。
婚約者ということで、国王夫妻の近くに設けられた席だ。少し肌寒い風が吹く中、こうしてスポーツ大会が幕を開けるのだった。
短距離走では、俊足のアーヴィンが圧勝だった。国王も王妃も喜び、立ち上がって拍手を送っている。
「ティーリア！　約束通り一位だぞ」

立ち読みサンプルはここまで

「凄い！　やっぱりアーヴィン様はかっこいいね」
彼は目をキラキラとさせて報告に来る。そんな姿はどことなくかわいらしくて、嬉しくなってしまう。彼はどんな競技でも一位を取っていた。
そうして会場が盛り上がる中、最後に庭園を一周する長距離走が始まる。これだけは全員一緒だ。
だがあと少しで走り始めるというところで、雨がぽつぽつと降り始める。
ティーリアはほんの少し、嫌な予感がした。前世でジュストーは雨に濡れても走り続け、発熱したからだ。
騎士団員は雨だからといって走ることを止めない。そのため競技は続行することになった。
「兄上、無理はされませんように」
「お前もな」
スタート、の合図で一斉に走り出していく。皆同じ制服を着ているので、判別がつくようにハチマキをしている。
アーヴィンは赤紅色、ジュストーは黄色の布をつけていた。
「アーヴィン様！　がんばってーっ！」
大きな声を出して応援しているうちに、天候が急激に悪くなっていく。ゴロゴロと雷が鳴ったかと思うと、一気に黒い雲に覆われ雨が降り始めた。
「どうしよう」
ずぶ濡れになっても騎士達は皆怯まず走っている。戦場であれば、雨が降ろうが戦うことに変わりはないからだ。
けれどここで、ティーリアは大きな不安に襲われる。
――これって……このまま濡れると後で、ジュストー様が高熱を出してしまうかも。
そして子どもを作る機能を失ってしまうかもしれない。そうなると、彼はそのことを自分の欠陥であると思ってしまうのに。
「ダメ……ダメだよ、今すぐ止めさせないと」
ティーリアは顔色を青くして、王妃に向かって声をかける。
「王妃様、ジュストー様を止めてください！　今すぐ身体を温めないと……」
「あら、そうは言っても途中なのよ」
「ティーリア嬢。心配するのはわかるが、彼だけを止めることはできない」
なんと国王が口を挟んできた。そうなると、ティーリアは何もできない。
雨の中、必死になって走り切った騎士達がゴールに近づいてくる。先頭集団は正騎士の中でも選りすぐりの者達だった。
「アーヴィン様！」
その中に一人、アーヴィンがいた。屈強な騎士達に比べるとまだ細いのに、必死になって走っている。
――凄い！　大人にも負けないで、追いついている！
懸命に走るけれど、最後は追い抜かれてしまう。それでも青少年の中では一位と、立派な成績